

申酉 (再茲歌舞伎花轡)

申酉の

花も盛りの暑さにも負けぬ気性と見かけから

言わずと知れしお祭りの

なりもすつかりそこら中

行き届かせてこぶもなく

ここでは一つあそこでは

頭かしらと立てられて

御機嫌じゃのと町内の

家ぬし方も夕日影

風も嬉しく戻り道

「モシ皆さんもご苦労でござりやす

こんな中で受けさせるじゃねえが

ほんの事だが聞いてくんねえ」

じたい去年の山帰り

言つは今更過ぎし秋

初の一座の連れのうち面白そつな口合いに

好いたが因果好かれたも

心に二つはないわいな

その時あいつが口癖に

あきらめて何のかのとありゃただの人あか凡夫のわれなり

滅法界に迷いやす

お手が鳴るから銚子の代わり目と上って見たれば

お客が三人庄屋ほん狐拳

とぼけた色ではないかいな

よいよいやな

よいよいやな

やあれよいこえかけるエー

引けやひけ引くものにとりては

花に霞よ子の日の小松

初会の盃馴染みの煙草盆

お洒落娘の袖袂したばの履物

内裏女郎のお召物

座頭のまわしあやめに大根

御神木のしめ縄

又も引くものは色々ござる

湯元細工のけん玉ぶり様故なら心の丈を

示し参らせ候べくの

人形筆売りこの首を長く出したり縮めたり

何とのろいじゃあるまいか

実にも上なき獅子王の

万歳千秋限りなく

尽きせぬ獅子の座頭と

お江戸の恵みぞありがたき。